

# 学生主体地域に定着

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

### 第5部 先進地に学ぶ (3)

⑤

#### 「はちおうじこども食堂」

「いただきます」。子どもたち、大学生、地域の大人たちが一緒に食卓を囲む。この日のメニューは唐野菜カレー、サラダ、かぼちゃのプリン。「おいしい?」「普通かな」「普通って言うな」「うそだよ、おいしいよ」。パンダナを巻いた大学生の問い掛けに、小学生がおどけながら答えると、テーブルに笑い声が広がった。

東京都八王子市のはちおうじこども食堂は毎月1回、開店する。市内にある寺の住僧の好意で駅前の一軒家内、近隣の好意で「ミダステーション」の建物を利用し、子どもが居場所をつくっている。子ども100円、大人300円。親べくと、ひとりで

## 居場所づくりの「いつも葛藤」

ぼつち、をなぐすのが目的だ。大学生主体で運営しているのが特徴。市内にある創価大学の学生を中心に、近隣の大学の学生や地域の大人たちがボランティアで関わっている。20歳前後のメンバーが「お兄さん、お姉さん」的な存在として、子どもが通いやすい雰囲気をつくっている。食後は家庭用かき氷機でデザート作り。かき氷に果物やシリアル、チョコレートなどのトッピングを薬しんだ。食べ終えらる、大学生を相手に夢中で遊ぶ子どもたちの数々が響いた。

■ 住んでいる地域で子どもたちを支える活動をしたいと学生4人が集まり、地域の協力者を得て半年間の準備の後、2015年6月にスタートした。チラシ

を作り、市内の学童クラブや公民館等に配って回ったという。代表の山口光司さんは「自分たち自身も子どもの貧困の理解を深めたい」という思いが、大人やスタッフも合わせると10〜20人の子どもの集まりをする。市内の学童クラブや公民館等に配って回ったという。代表の山口光司さんは「自分たち自身も子どもの貧困の理解を深めたい」という思いが、大人やスタッフも合わせると10〜20人の子どもの集まりをする。



手作りの看板で、親しみやすく入りやすい雰囲気を演出する「はちおうじこども食堂」=13日、東京都八王子市

が集まり、反省会を開く。ポイントの面積より狭小だった「以前よりスムーズに定着できた」「次回ももっと子どもと積極的に関わりたい」。若者らしい生真面目な意見が次々出される。会計担当の三宅正太さんは「自分の理想で動いてきたが、当事者の気持ちや本音に理解できていないのか、知らず知らずのうちに傷つけていないか、いつも葛藤がある」と打ち明ける。

「自分たちも未熟な部分が多々、毎回反省ばかり。でも、あてにして来てくれる子がいる以上、大人の都合でやめるまでほできない。子ども食堂を一時的なブームで終わらせたくない。子ども食堂の活動は始めるより継続することが難しいと日々、痛感している。

子どもに聞いているという白眉はまた持てないけど、目指すべき姿に少しずつ近づいていきたい。悩みや喜びを仲間と共有しながら、若者たちが居場所づくりへの力を発揮してくれたい。」

毎回の開店後はスタッフ全員 田嶋正雄